別紙様式（B4 横型）

令和２年度福岡県立若松商業高等学校自己評価表（計画段階・実施段階）

福岡県立若松商業高等学校長　　印

学校番号　２０

学　校　運　営　計　画（４月）			評　価（３月）
学　校　運　営　方　針	専門性が高く、特色ある教育活動を展開することによる「若商ブランド力」を確立する。また、地域に信頼され、地域に貢献する社会人を育成する。		A
昨年度の成果と課題	年　度　重　点　目　標	具　体　的　目　標	
昨年度は、授業改善はもとより生徒に得意技を習得させ自信と誇りを持たせるための具体的な取組までは実施できなかった。そのため、今年度は授業改善をはじめ、生徒に自信と誇りを持たせるため、検定直前講座を全生徒に実施し検定合格率を上げる指導を行う。	高い目標・目的を持たせる	「志を立ててもって万事の源となす」を旨とした教育活動の展開。	
	基礎学力の定着と専門性の深化を図る	魅力ある授業・わかる授業により基礎・基本の定着を図り、共通教科の基礎学力を固め、専門性の深化を図る。	
	検定試験の取得に力点を置いた指導の充実	検定試験に挑戦し合格する成功体験を積ませ、更なる高度な資格に挑戦させる。	
	生徒のチャレンジ精神を育む	国公立大学及び難関大学への挑戦と、新たな求人開拓により生徒の希望進路実現を目指す。	
	広報活動の充実と本校の魅力発信を行う	学校活性化推進部を広報の主軸に据え、本校の魅力を地域や中学生に発信し、志願倍率の回復を目指す。	

評価項目	具　体　的　目　標	具　体　的　方　策	評　価		次　年　度　の　主　な　課　題
学習支援	基本的生活習慣の確立	遅刻指導の徹底。欠課時数報告カードを有効活用し、生徒の欠席状況を把握する。	B	A	組織的に取り組む体制を整え、概ね成果をあげることができた。しかし、なかなか徹底できない部分などがある。来年度も引き続き、基本的生活習慣の確立、授業規律の確立を柱として全職員共通理解のもと粘り強く指導していく必要がある。
	事業規律の確立	教務スタンダードに沿って、職員が共通理解のもと共通実践を行う。	A		
	本物体験によるわかる授業の実践	学年や他分掌と連携し、生徒に高い志を持たせると同時に生徒が本物に触れる機会の充実に努める。	A		
	学校行事等の円滑な企画運営	本校の教育基本方針に基づき、効率的に教育活動が行われるよう職員の協力体制を強化する。	A	A	グランドデザインの教育方針のもと、円滑な学校行事等の企画運営ができた。また、他の分掌と連携し、適宜必要な職員研修を企画し充実した校内研修会を開催することができた。校外研修の多くが開催中止となった為、次年度はオンラインを活用した研修を取り入れる。
	校内研修の充実	生徒の学力保障と専門教科の指導力向上を図るため、職員研修の充実を図る。	A		
	研修対象者へのバックアップ体制強化	様々な校外研修への積極的参加を促す。	B		
	学校ホームページ等の随時更新	校内での発行物の発行（かっぱニュース・部活動新聞「ファイト」など）や学校ホームページ、若商ブログの随時発信を行う。	B	A	来年度の入学生にアンケートを実施し、学校訪問、中学生進路説明会、出前授業、Funミーティング等の内容の有効性を検証する必要がある。
	効果的な学校訪問と出前授業の実施	機を得た学校訪問の計画立案し、「若商」の魅力を伝えるため生徒による効果的な方法を実施する。	A		
生徒支援	規範意識を高める	生徒指導や教科指導などあらゆる教育活動における規則等を遵守させる。	A	B	新型コロナウイルス感染症拡大防止で学校行事等の中止や延期となったが、対策を立て内容の検討、縮小しながらも実施することができた。生徒会を中心とした挨拶運動や校外清掃活動などを定期的に行い、生徒の利他の心を育てる機会となった。次年度も生徒会や各委員会を中心とした学校行事等を通して学校の活性化ができるよう早期に準備していきたい。
	豊かな心の育成	校訓「自立・創造・協力」を通して豊かな心を持った生徒の育成。	B		
	部活動の活性化と加入率の増加	部活動加入率の目標を４０％にするとともに活性化を図る。	B		
	生徒会や各委員会の充実	生徒会や委員会を適宜開催し学校行事等を充実させる。	A		
	学校保健計画実施による健康の保持増進	生徒の定期健康診断等の実施による、健康状況の把握及び健康の保持増進に努める。	A	A	定期健康診断等は、実施日や実施方法について学校医と調整を重ねたことで円滑に実施できた。また、保健委員会は計画以上に活動できたが、美化委員会は予定通り実施できない部分もあったため、次年度は計画的・組織的に活動する。
	校内外の環境美化	大掃除で美化委員による美化点検（年６回）を行い、環境美化に努める。	B		
	委員会活動の活性化	保健委員会や美化委員会を計画的に開催し自主的活動を促す。	A		
キャリア支援	学習意欲の喚起および基礎学習の習慣化	年２回の基礎学力診断テストを実施し、毎週１回、１０分間の基礎学習の時間を実施する。	A	B	進路が現在行っている基礎学習（朝の１０分間）、こころざし講座、進路ガイダンス等について効果があるのかということや指導方法についての検討、また、学びの記録の活用方法や３年間のキャリア教育についての理解を深めること、３年生に関する予約奨学金が年ごとにシステム制度が変わっているため、引継ぎの必要性がある等様々な課題がある。
	挨拶や言葉遣い、マナーの全学年での指導	進路ガイダンスだけではなく、学校生活全般で挨拶や礼、マナーを身に付けるための指導をする。	B		
	進路ガイダンスの充実	進路ガイダンスの内容を改善し、体験活動や社会人から学ぶ機会を増やす。	B		
第１学年	基本的な生活習慣の確立	学校と家庭で連携し、集団生活の中での規律や社会参画を意識し、普段の生活指導を徹底する。	A	A	学年の先生方と保護者との連携を密にして、生徒情報の共有に努めることができたので、次年度も継続的に取り組んでいく。生活面では基礎的な生活習慣の確立と他者を思いやる心の涵養、勤労意欲の向上を図り、学習面では自ら目標を設定し、計画・実践していけるようにスケジュール管理を行う機会を増やし、取り組んでいくことを課題とする
	基礎学力の定着と課題解決能力の育成	授業や基礎学力テスト等の学習に取り組み、教科間の連携を強化し、学びを通して課題解決能力の育成を図る。	A		
	キャリア教育の推進	あいさつの習慣化や制服の着こなしが、社会に出るために必要なことであることを理解させ進路ガイダンス等を通して、勤労意識の向上を図る。	B		
第２学年	基本的生活習慣の確立	家庭との連絡を密接に取りながら，集団生活のルールとその必要性を理解させる。	A	A	保護者との連絡も密にできており、生徒は集団生活のルールを守ることの重要性も理解できている。生徒の中には理解はできているが、行動が伴っていない生徒が見られるので、３年生の進路決定に向けて、より細かな指導に取り組んでいくことを課題とする。
	授業を中心とした基礎学力の定着	進路決定に向けた基礎学力の養成のために、授業を中心とした学習に取り組むことの大切さを自覚させる。	A		
	進路意識の形成	学校を休まないことや時間を守ることの習慣が、社会に出た時に重要であることを理解させる。	B		
第３学年	基本的生活習慣を確立	家庭との連絡を密に取り、基本的な生活習慣の確立を目指し、規律ある学校生活を指導する。	A	A	就職の求人状況が厳しくなる中、各自の進路決定に向けて努力し、結果を出すことができた。しかし、遅刻、欠席が１１月以降増え、進路に直接影響しないことからか、気持ちにゆるみがでている。遅刻、欠席をすることを安易に考えさせない指導が課題となる。
	望ましい人間関係の構築	最上級生としての自覚と誇りを持たせ、学校行事においてリーダーシップを発揮し、学校生活を充実させる。	B		
	進路意識の向上と進路実現	社会人としての基礎的な力を身につけさせ、進路の目標に具体性を持たせ、実現に向け努力するよう指導する。	A		
人権教育	自尊感情の育成	自己を肯定し、他者への共感力を身に付けさせることで、自尊感情を大切にする生徒の育成をはかる。	A	A	校外との交流はできにくかったが、さまざまな校内職員研修、特設授業等を通して生徒、職員の人権意識を高めることができた。しかし生徒たちの他者への共感が身に付いたとはいいがたい。また、差別はダメだと分かっているものの具体的に何をすればいいのかまで考えが及ばない。これらがこれからの課題と思われる。
	人権・同和特設授業の充実	従来の計画だけにこだわらず、他者とのコミュニケーション能力や、多様な価値観への共感力を育成する。	B		
	人権教育に関する職員研修の充実	職員研修会を実施することにより、新たに制定された関連法規にも対応した統一感のある職員意識を醸成する。	A		
商業教育	自信と誇りを持った商業高校生の育成	専門性深化により検定試験の合格へと導き、成功を体験させ、さらなる挑戦意欲を喚起させる。	A	A	検定試験を受験する機会は例年と比べ減ったが、上位級へ挑戦する姿勢が見られた。また次年度以降も地元二島商店街と交流し、マナーやコミュニケーション能力を育成していく。
	地域から信頼される商業高校生の育成	地域と連携した実学を通し、商業高校生としてのマナーやコミュニケーション能力の育成を行う。	A		
事　　務	教育環境の整備	予算の節約を進める（5%削減を目標）とともに、必要性の高い施設修繕・物品購入を適切に措置する。 新型コロナウイルス対策に対応して、柔軟かつ臨機応変な予算対応等に努める。	A	A	予算削減の中、生徒に対する危険性が高いものから修繕を行い、物品購入においても必要性の高い物品の精選に努めた。就学支援では、きめ細かい対応で各学年との連携が図れた。
	生徒の就学支援	各学年と連携して生徒の経済状況の把握に努め、生徒の就学を適切に支援する。	A		